



Title	英国民性と文学
Author(s)	甲元, 健雄
Citation	大阪外大英米研究. 1962, 3, p. 29-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98941
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

英 国 民 性 と 文 学

甲 元 健 雄

英文学を英語でかかれた文学という広義に解釈すると、イギリス本国以外の連邦諸国の文学はもちろんのこと、さらにもともと英本国の文学を母体として出発し英語をその表現手段に用いながらも、新大陸の特殊な地理的条件に規制され植民開拓精神を基盤に独特な精神的雰囲気の中かで発展してきたアメリカ文学も当然そのなかに加えられて、英文学の概念はきわめて大きなものとなるであろう。またイギリス諸島にだけかぎって考えてみても、スコットランド、アイルランド、ウェールズがおのおの特殊な言語を織りまぜつつ独特な文学をもつ反面、共通の伝説——とくに *Arthurian Legends*—— に影響されているということ、その上英文学に対するアメリカ文学の反作用⁽¹⁾などをおもいあわせると英文学の複雑さが理解されるであろう。したがって、その文学の表現手段である英語が世界の広大な地域におよんでいるということ、また異った様々な要素をふくみながらも、それらを同化吸収して一つの伝統を形成していること自体が、英文学の主要な特徴の一つとして数えられねばならない。

つぎに、この文学の伝統が1000年以上に亘っていまにおよんでいるその歴史の長さもまたその特徴の一つである。多くの英文学史は Geoffrey Chaucer からはじまり、かれを英文学の鼻祖であるとする。ノルマン人のイギリス征服により、英語とフランス語が融合し、イギリスに真の国民文学が生れたのが14世紀末であり、Chaucer が英文学に仏、伊、ラテン文学の伝統を導入して、英文学を当時の世界的水準にまでひき上げた意味からすれば、かれが英文学の源であることは一応当然なことであろう。しかし Chaucer より逆のぼるこ

(1) cf. J. Lehmann: *New Writing in Europe* p.22 ff. (Penguin Books, 1940)

とさらに 500年、古代イギリスではすでに Northumbria や Wessex に文化の花が開き、アングロ・サクソン人がキリスト教に改宗していくにつれて Northumbria には、Caedmon, Cynewulf などの宗教詩人があらわれ、Wessex のアルフレッド王は、自ら散文の大家となって、自国語 (O. E; West-Saxon dialect) で *The Anglo-Saxon Chronicle* の編纂や Boethius の *On the Consolation of Philosophy* を訳出して、グレコ・ローマンの人道主義的文化導入の努力がみられる。またアングロ・サクソン人が古代イギリスに侵入移住したとき、いくつかの短詩の形で伝えられた *Beowulf* は、Northumbria の一詩人または一群の詩人によって3000行以上の一大叙事詩につくり上げられイギリス最古の叙事詩となっている。

この長い歴史をもつ英文学が、その作品量でも世界文学の最高峰であることも強調されねばならない。E. Legouis と L. Cazamian もその「英文学史」序文の冒頭で、「独創美のもつとも豊かな文学の一つである英文学は、世界における最も広大な文学である。過去、現在の文学作品を総合した場合、古今を問わず英語による作品が他のいかなる国語によるものよりも巨大な量に達している⁽²⁾」と述べている。つまり、英文学の量的偉大さをまずとりあげているわけであるが、古代においてはギリシア、近代においてはフランスと並んでイギリスが長い文学の歴史と作品量で世界に冠絶していることを誇ってよいであろう。イギリス人が個人とその個性をきわめて重要視することは、一般の常識となっているが、かれらは、イデオロギーのために、人間の魂の自由とその個性の強烈な色調を犠牲にすることを極力避けてきたといえる。イギリスの文学作品はもちろん、各時代の思潮を反映したり思想的に時代を啓発したりするが、究極には、つねに一個の人間の心理、性格やその実践的行為が重視されることに言及して Evans は、「バースのおかみさんがおろらく 最初に内的独白を語

(2) *A History of English Literature* Vol. I (Dent & Sons, 1926)

った人であり、ジョイスのブルームの黙想をもってしてもなお個人の心の研究は終わっていない」⁽³⁾とのべている。さらに Evans は、個性の尊重がイギリス人の伝記や日記文学への熱情となって現われていることに注意して S. Pepys の「日記」をあげているが、J. Evelyn の「日記」もつけ加えられるべきであり、とくに Pepys のそれは、H. F. Amiel の日記抄 (*Fragments d'un Journal Intime*) と比較するとき、繊細な感受性と知的な分析力にめぐまれたフランス系スイス人が、内気で実践力に欠け内面的な分裂に悩んでいるのに対して、自意識の強い実践力をもつイギリス人の代表的な日記といえるであろう。われわれはさらに、伝記辞典界の一大偉観というべき大英人名辞典 (*Dictionary of National Biography*) をおもい浮ぶべきであり、評伝双書の道を拓いたイギリス作家評伝双書 (*Eng. Men of Letters Series*) や偉人伝双書 (*Great Lives Series*) をつけ加えるべきであろう。J. Boswell の「ジョンソン伝」は別としても、伝記文学には、対称の人物を敬愛する余りいたずらに冗漫となり虚偽が多くて、文学作品としての節度と香気を失う危険性が潜んでいる。とくに19世紀にはこの傾向がつよく、叙述しようとする人物の実録が大巻二冊以下に制限されることは稀であったが、20世紀に入るとこれとは逆に、故人を非英雄化し偶像を破壊しようとする L. Strachey の *Eminent Victorians* や *Queen Victoria* などの作品があらわれて、いたずらに事実を暴露し余分な毒舌をあびせかける形となってくるが、一次大戦後の幼滅の時代に属する人びとの境位を考えてみれば、この傾向の意義も理解できる。

さて個性の尊重には一つの矛盾がふくまれているようである。すなわち、自分の個性を強く主張すれば他人の個性を無視することにもなり、相手の個性を全面的に認めようとするれば自分の個性を抑圧する必要があるだろう。とくに相手の奇癖や滑稽に対しては、共感と同時に反感を抱くことが必ずありうるわけ

(3) *I for Evans: English Literature*, p. 10. (Longmans, 1948)

であるが、Priestley の言葉をかりていえば、「イギリス人にとっては、おそらく他の国民よりも、共感と反感の調和を保つことが容易である。それはイギリス人が精密な理性や一つの目的性や外面的な事実によって支配されることなく、精神的雰囲気によって左右されているからである」。(4) イギリス精神は、「その真髄はおそらく情調の内質 (a quality of feeling) であろう——本質的には一つの夢」(5) などといわれるが、精神的雰囲気とか情調の内質とは、その意味の把握しがたい言葉ではあるが、おそらくそれは、合理的な理性でも深奥な観念性でも、また俗物的な愚鈍性でもない、堅実な常識つまり心の平衡にささえられた社会的共通感覚 (sens commun) であると考えたいのである。フランスの理性からすばらしい機知と鋭い分析力、ドイツ的観念から思弁的論理や非現実的な空論、また俗物的な愚鈍性から馬鹿笑いと駄洒落が生まれるとすれば、イギリス的共通感覚——一連の思想や観念によって画一的に支配されない自由な精神の相互理解を基盤とする心的雰囲気からは、各人の特異性とその個人差の生じる理由を徹底的に掘り下げないまま、これを認めたい気持——理知的精神からみれば一笑にふしたい変哲も滑稽も、その側に立ってなかば反感を抱きながらもなおこれに同情したい気持、つまりイギリス的ヒューモアが生じてくるのであろう。「イギリス人の心では、陽気と憂うつは、光と陰、日光と霧のように揺れうごく」(6) のであり、「イギリス的ヒューモアは、純英国的な一つのひねりをもつヒューモア」(7) なのである。Priestley は Duc de Sully の「回想録」から“Les Anglais s’amusent tristement selon l’usage de leur pays.” を引用して、イギリス人の喜びと悲しみを外国人が区別できない例としているが、この引用はイギリス的ヒューモアの解釈の一つの鍵となるも(8)

(4) J.B. Priestley: *English Humour*, p.12. (Longmans, 1929)

(5) A.L. Rowse: *The English Spirit*, p.35. (Macmillan, 1944)

(6)(7) J.B. Priestley: *English Humour*, p.9.

(8) *ditto*, p.2.

のである。

Charles Morgan は、*The English Character* で、ゲーテがエッケルマンに説明したイギリス人の特性についてのつぎの言葉を重視し、ゲーテこそ英国民性の真の理解者だとしている。⁽⁹⁾ゲーテはいう、「イギリス人の魅力の本質は家柄や富にあるのではなく、かれらが自然によってつくられたものになりきる点にある。イギリス人には損われたり汚されたしたところは微塵もないし、不徹底や歪曲もみられない。そしてこのままでイギリス人は申し分のない完全な人間なのである。しかし同時にわたくしは、かれらがときとして徹底した馬鹿であることも全面的にみとめるものではあるが、しかしそれとても一つの大事なことであって、自然の尺度にかけてみればつねにある重要性をもつものである」と。自然を分析し定義づけるために自然を歪めるようなことをしないで、自然の法則に本能的にしたがい、生命の法則は不完全であることを認めた上で考えまた行動するイギリス人が問題にされているわけである。つまり、全一的な人間として自然に即したいき方を貫くことがイギリス人の特性であって、現実の矛盾や逆説をみとめる心の寛大さと、笑と涙の二つの面をさらに高次の面で調和綜合しようとするイギリス人の常識が重要であり、悲劇に喜劇性を加味する傾向をとったエリザ朝の悲劇に対して18世紀古典主義時代の批評家達ははげしい批難をあげせかけたが、当時悲劇の巨匠ドライデン自身が、悲劇と喜劇の混合こそ英国民性に即したものであるとしたことを合せ考えると興味がある。

さて英文学の真髄は詩であるといわれるが、きわめて常識的であり実際家であるイギリス人の文学が、詩の領域でその本領を発揮していることは興味ある事実といわねばならない。この謎を解く一つの鍵として英語が詩的用語としての適性を高度にそなえている言語であること、しかも豊かな常識をそなえた国

(9) *Aspects of England* ("The Spectator" Booklets VI), p. 9. (Methuen, 1935)

民の言葉であるために詩的用語としてすぐれているという一見逆説的な事実をまず考察してみることにする。

すでに述べたように、常識とは自由な精神の相互理解を土台とする社会的共通感覚であって、常識的な国民の言語には、理知的な分析に適するフランス語や観念的な思想様式に適するドイツ語などにはあまりみられない言葉の余韻というものがあって不思議ではない。つまり、事実や思想を分析的観念的に徹底的に深く掘り下げないままにして、人間の魂と魂との交流をもとめようとする共通感覚をもつ国民の言葉に、余韻が豊かにみられることは容易に想像されることである。余韻とは、一つの言葉のもつ「意味の陰影」の広さと深さともいえるかとおもうが、言葉が形を変えずにその意味が微かながらに変動していわゆる意味の重層化がおこなわれ、言葉と言葉との間に理知では理解できない関連が成立して観念的にはつかみどころのない味をもつためには、常識にささえられた相互理解の精神的雰囲気が必要なのである。

L. P. Smith は、英語の進化の一大特徴として「限定詞としての名詞」をとりあげ、「名詞の形容詞用法は古代英語の時代より用いられ近代において大いに発達した新しい極めて便利な言語上の変革であって、中国語をのぞいて他に類例がなく、言葉の意味が語尾によってではなく語順という簡単な方法で表現されるという理想的言語への一大進化である」⁽¹⁰⁾と述べているが、語の位置が自由に動いてその意味の陰影が重層化されていくということは、平凡な常識から考えても英語が詩的用語としての適性をそなえているといつてよいであろう。この線に沿う英語の発達には、英語においては品詞別は厳密な意味をもたないという結果となってあらわれていることは衆知のとおりである。

さらに注意すべきは前置詞の豊かさであろう。一例をあげると、英語の about, of, from, out の役目をフランス語では de 一つで担わねばならない

(10) *The English Language*, pp. 23, 24. (Thornton Butterworth, 1938)

し、at, to, till はフランス語ではà一つで表わさねばならない。Sir Philip Sidney は、「英語を混合語だという人があるであらうが、二つの言語相互のもっともよいところをとっているのであれば、それはそれだけ結構ではないか。またある人は、英語は文法に欠けているというであらうが、そうではなくて、文法をつくればつくりうるのであるから文法にかけているのではないが、むしろ文法を必要としないという名誉を担うものである。それはそれ自身きわめて平易で、格、性、法、時制の煩わしい変化がないからだ⁽¹¹⁾」という。衆知のごとく、ノルマン人の侵入によって英語は混合語となったが、さらに古くは、アングロ・サクソンの文法はデーン人の侵入によって弱化し「その文法はノルマン人による征服の結果一層簡略化され、文法の単純化は語いの増加によって補われた。これは言語の進歩がたどる当然の結果であって、原始民族の語法の煩わしきについては、C. Darwin も *Descent of Man* で強調していたかとおもう。英語が、煩雑な語形によって文法関係を表わす総合的な言葉から語順、前置詞などによる分析的な言葉へ進化したことは、詩的用語として自由自在に駆使される適性をもつことになったといえるのである。さらに英語は柔軟性のある慣用語法に富んだ言葉である。17世紀の英文学は実験の連続であって、このため英語は文学用語として完成されたといわれるが、近ごろ読んだ書物にあげられている豊富な慣用語法の一例を示しておくにとどめる。 rather your room than your company, let's see your back, come again when I bid you, spare us your place, save your credit, the door is open for you, there's nobody holds you……⁽¹²⁾

英語はまた 'conceit' に富んだ言葉あるといわれる。'conceit' とは本来一つの単語またわ二つ以上の単語の並列にふくまれた心像 (image) を意味した

(11) Sidney's *Apologie for Poetrie*, edit. J. C. Collins, p. 59 (Oxford, 1950)

(12) cf. C. V. Wedgwood: *Seventeenth-Century Eng. Lit.*, p8 ff. (N. Y. Oxford Univ. Press, 1961)

が、18世紀古典主義批評はこの用語に、「不必要で誇示的な潤色」という意味を付与したために「虚飾虚栄」という意味にまで堕してしまい、その後その意味は改善されたけれども、せいぜい詩人の「奇想、空想」の意味に用いられ、論理的な思想には不必要なものという貼札をはられている。しかし英文学の作品には、詩はもちろんのことその散文にも純粋な意味での 'conceit' が多くふくまれ、論理を支えながらも隙さえあれば論理に反抗しようとする特徴に注意せねばならない。M. Arnold は、「フランス文学の強みはその散文作家に、英文学のそれはその詩人にある。フランスの多くの有名な詩人の名声はかれらの示す知的特質、つまり散文の顕著な支えである特質に依存しているのに反して、英国の多くの有名な散文作家の名声はかれらの示す想像的特質、すなわち詩の顕著な支えである特質に依存している」と述べている。現に Arnold⁽¹³⁾ の固苦しい評論でさえ、この 'conceit' のよい例の一つを提供してくれることは、その読者のだれしも認めるところであろう。J. Conrad はポーランド生まれでありながら、異常な努力を払って英語を心に植えつけ、立派な英語の驚くべき文章家となった人ではあるが、イギリス人は、かれの正確な英語に感心する割りにはその著作に愛着を感じないといわれるのも、いま引用した Arnold の言葉あたりにその原因があるのかもしれない。この Conrad が 'oaken' という語のもつさまざまな意味を他国語にうつす場合、適確な相当語のないことをかこったことがあると R. Graves がいつている。Conrad にいわせると、「ロマンス語では、'oaken' はただ一つの意味しかもたない——つまり 'made of oak-wood' である。ところが英語では、oaken chaplet, oaken glade をはじめとして、oak の特質とみられる、uprightness, strength, venerability, hardness など多種多様の内質の意味が担わされている。」さらに Graves は、sailorはseaman, seafarer, mariner, shipman⁽¹⁴⁾

(13) *Literary Influence of Academies; Essays in Criticism* 1st Series. p.53.
(Macmillan, 1932)

などの同意語と比較して一番精彩のない語ではあるが、それにさえ good sailor や bad sailor などのように特殊な意味をもつ場合があることを指摘して、英語が、一つの語をできるかぎり一つの意味に限定しようとする論理的な言語よりも含蓄のある言葉となっていく傾向があることを示唆している。⁽¹⁵⁾

豊かな意味の陰影をもつ英語の一つ一つの語は、最善の詩では生動的な比喩的方法によって活用されている。‘Figure of Speech’ は詩の根本的要素の一つであるが、それは一言で「驚異」の要素といえるであろう。ここでいう「驚異」とは陳腐なものと、それとは縁遠くおもわれてこれまで連想もされなかった新奇なものとの連想によって なしとげられる ‘Imagery’ のことである。

‘Imagery’ でもっとも勝れた作家として Shakespeare があげられることはいまさらいうまでもないし、Keats は ‘Imagery’ を自由に駆使した点で、Shakespeare をしのばせるものがあり、かれの「書翰」をよめば、かれがいかに ‘Imagery’ を重視したかがわかり、かれが Arnold によって、「Shakespeare とともにある」といわれた理由の一つが、この ‘Imagery’ の自由な駆使にあることも理解できる。⁽¹⁵⁾

イギリスの小説がとくに性格描写にすぐれていることも、イギリス人の個性尊重の精神からいって当然であろう。J. B. Priestley は、「イギリスでは幾多の文学上の流行があつたにもかかわらず、その間を通じて小説に対する判断の一つの規準がそのままつづいてきた。われわれイギリス人は、真にせまって鮮かに描かれた性格につよい興味を抱いている。……もし小説に対してただ一つの試金石を適用すべきだとすれば、この性格こそ一番安全な試金石であるにちがいない」と断言する。⁽¹⁶⁾ 個性の尊重と個人の社会に対する適応性、社会的共通感覚とその経験主義と、結局神秘主義にその基礎をおくと考えられる

(14)(15) *Impenetrability*, p. 32. ff. (The Hogarth Press, 1926)

(15) *John Keats; Essays in Criticism*, 1st Series, p. 119. (Macmillan, 1927)

(16) *The English Novel*, p. 6. (Ernest Benn, 1928)

‘Imagery’の創造との関係はどうであろうか。イギリス人の神秘主義は日常経験から発して、現実から遊離して神秘ならんがための神秘主義ではない。経験を重視するイギリス人は、その経験主義を直感的あるいは先見的なものにする方法を‘Imagery’にみだしていると考えたいのである。‘Imagery’は、未知のものを既知のものにたとえて人間の経験を拡大整理する重大な役割を演じるからである。また人間生存の強烈さを意識し追求するイギリス人が、人生を理想化し人生が美と魅力にみちたものであるとするロマン主義をのこしていることも不思議ではない。文学史上の「イズム」としてではなく、いかなる「イズム」の時代にも一つの情操としてのロマン主義が英文学を流れているように考えるのである。これは、人間を単なる機械や反射運動の集積以上のものであるとする風柳の精神とでもいうべきものであろう。ロマン主義時代の Wordsworth の理論と実践、また Pre-Raphaelites Brotherhood 運動における D. G. Rossetti の理想とその結末を考えてもあきらかである。

以上二、三の書物を手がかりとして、心に浮ぶままのことを記したため、まことに雑駁な随筆とも論考ともつかぬ妙なものになったが、英国民とその文学を考察する筆者のささやかな踏切台である。